

第34回

'23選抜女子駅伝
北九州大会

- 期 日 / 2023年1月22日 (日)
 - コース / 小倉北区・小倉城歴史の道—
八幡東区・前田二丁目西交差点
折り返し 27.2km
- 一般の部 5 区間 高校の部 6 区間



一般の部 5区で力走するパナソニックのアンカー・中村優希

一般の部

名門パナ、初V 双子妹の引退、花添え

詩織のために——。満身創痍(そうい)のパナソニックを初優勝へ突き動かしたのは、2020年から主将として引っ張ってきた森田詩織の現役最後のレースに花を添えたい強い気持ちだった。

思いが一番強かったのが双子の姉の香織だ。マラソン練習の疲労で最長10・4^{キロ}のアンカーから3・9^{キロ}の3区へ回ったが、一般の部でトップ、全体では先頭の神村学園から2秒遅れの2位でスタートすると、1^{キロ}手前で全体でも首位に、区間賞の走りで差を広げた。

4区で待ち構える詩織との最後のたすきリレーでは「今までありがとう」と、笑顔で背中を2回ポンポンとたたき送り出した。詩織はあふれる涙をサングラスで隠し、一人旅となった3・8^{キロ}のラストランで2位九電工との差を1秒広げて優勝への道を築いた。

17、18年に全日本実業団対抗女子駅伝を連覇した名門も21年の大会は故障者が相次ぎ25位に沈んだ。苦しい時期にチームを支えたのが詩織だった。悪い流れを変えるため、一度は21年度限りで決意していた引退を翻意し、22年1月に北九州市で右股関節を手術。再起を誓った地で、有終の美を飾った。

森田詩織・パナソニック「優勝という形でたすきをつなげてくれ感謝の気持ちでいっぱい。チームには力を持った選手がいる。もう大丈夫」



パナソニック3区、姉の森田香織(右)からたすきを受け取る4区、妹の森田詩織

高校の部

神村学園、充実の快勝

今年度の集大成となる駅伝で、神村学園が序盤から主導権を握る理想的なレースを展開した。2位の大阪薫英女学院に1分差をつけての快勝だった。

昨年12月の都大路に続き、この日も1区を任された田島愛梨(3年)は冷静に3位をキープ。2区で留学生のジェプチルチル・ブレンダ(1年)がトップに立つと、3区以降も首位を譲らなかった。6区間中3区間に1年生が出場し、いずれも区間賞を獲得するなど、次の世代も順調に成長している。

地元の北九州市立の1区、野田真理耶(3年)は、ラスト300^{メートル}で父・敬さん(50)の姿を確認すると、腕の振りも大きくなりスピードが増した。同じ距離を走った一般の部の選手よりも先着しての区間新だった。

田島愛梨・神村学園1区「一つ一つの大会が経験になる。その経験を発揮して、自分たちがかなえられなかった日本一をかなえてほしい」

山口栄一・北九州市立監督「(1区の野田選手が)実業団選手に勝つてくるとは」



高校の部 1位でフィニッシュする神村学園のアンカー・小倉陽菜